伝統と革新、家具に独創性

名作の再構築／現代的な色彩・素材

イタリア・ミラノで毎年春に開催される「ミラノ・デザイン・ウィーク」は、本会場ロー・フィエラで開かれるミラノサローネと市内で開かれるフォーリサローネ（サローネの外）を総称したものだ。歴史的建造物を生かした展示や旗艦店を活用した新作披露など、今年も独創的なデザイン発信が見受けられた。

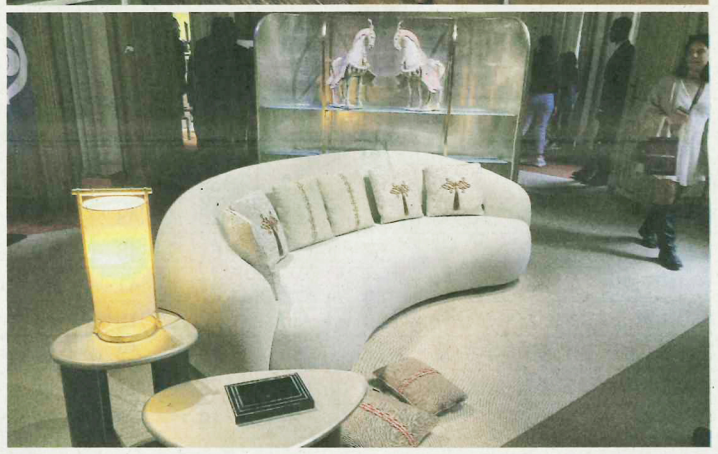
ミラノ市内の高級家具店が立ち並ぶドゥリーニ通りでひときわにぎわったのは、イタリアを代表する名門ブランド「カッシーナ」の旗艦店での新作発表だ。2015年にアートディレクターに就任したスペイン出身のインテリアデザイナー、パトリシア・ウルキオラ氏が構想した「カッシーナ・パースペクティブ2024」をもとに、名だたるデザイナーによる家具などが披露された。

カッシーナは世界的な名作を維持するために、数年前から「アイコニックなデザインの復活」を手掛けている。今年も時代を超えた名作を再構築した。

店内に足を踏み入れると、幾何学的なボルドー色のフレームとブルーグレーの柔らかいクッションの対比が斬新なソファが鎮座している。イタリア人建築家のカルロ・スカルパが1973年にデザインし、今年復刻されたソファ「コルナーロ」だ。クッション材はポリエチレンテレフタレート（PET）繊維などを使用した。

歴史的建物や大空間舞台に発信

同じフロアには、マイケル・アナスタシアデス氏による新作の大理石のローテーブルをコーディネートした。同氏の新作チェアはシャルロット・ペリアンによる木製のテーブルとの組み合わせでも軽快にみせた。店内に広がる伝統と革新のコラボがカッシーナの確固たる理念を感じさせる。



カッシーナの旗艦店の隣に位置する「B&Bイタリア」。アートディレクターであるピエロ・リッソーニ氏が掲げたテーマは「ザ・コレクション」だ。新作を発表するだけでなく、歴史的な名作や復刻に価値を見出し、現代的な色彩、素材、技術を取り入れた名作と新作が紡ぎ出す独創的なコレクションをみせた。

リッソーニ氏がデザインした新作のソファシステム「ダンボドゥエ」は、昨年発表した「ダンボ」の弟分。トレンドカラーのココア色がソフトな雰囲気を醸し出す革張りのソファだ。店内の随所に、日本画のようなガマの穂を背景に白鷺（しらさぎ）が羽ばたいていくさまが繰り返し映し出されていた。日本の伝統美が世界でも共感を得ているようだ。

店内のアクセントに1988年にアキッレ・カスティリオーニがデザインした復刻版の照明「タラクサカム88」を展示した。タラクサカムはタンポポを意味し綿毛を連想させるオブジェのようなペンダント照明だ。

ミラノ中央駅から3駅離れた地区に、4000平方㍍のミラノ初の旗艦店を開業したパオラ・レンティ。廃工場の跡地を保存しつつ、リノベーションした建物は新作発表の場にも重ねた。庭園などを含む大空間で自然界とテキスタイルデザインとの調和を試みる環境と捉えている。

廃棄されるはずの素材に機能と美的価値を取り戻す「MOTTAINAI（もったいない）」プロジェクトの第2弾は、佐藤オオキ氏が率いるnendoによるコレクション「花嵐」。180色のカラーバリエーションがある繊維はリサイクル可能なポリプロピレン製で防水加工を施した余剰素材だ。日本らしさを感じさせる椅子やランプシェードなどを発表した。

パオラ・レンティ氏は、創業時から「トレンドカラーは意識していない。自然界に溶け込むような色の広がりを目指している」と語っていた。生い茂る植物と呼応するように緑色のセラミックテーブルや編み込みの椅子が爽やかだ。

アルマーニ／カーザは、普段立ち入ることができない歴史的建造物であるアルマーニの本社、「パラッツォ・オルシーニ」で新作を発表した。テーマは「世界からの響き」。ジョルジオ・アルマーニ氏が旅するなかで、最もインスピレーションの源となった欧州、日本、中国、アラビア、モロッコをイメージした部屋にアルマーニ氏の思い出が展示された。

日本の部屋では、映画「影武者」から着想を得て、日本の侍の鎧の質感と形状にこだわった新作のデスクを披露した。模様は鎧からヒントを得たモザイク柄を水牛の角で表現。中国の部屋では、曲線が美しくゆったりとしたソファが目を引いた。ソファの背後には、金箔をあしらったラッカー仕上げのガラス天板が特徴の優美な棚が展示された。

フォーリサローネでの新作発表は、迫力ある展示空間を含め、独創的なデザインを発信できるという大きな特長があるようだ。

（ホームファッションコーディネーター　堀和子）